

10年前の整備計画を見直し、再スタートを切った「いい川」づくり

市野川で進む 「“いい川”づくり」



埼玉県ほぼ中央に位置する比企地域（東秩父村，東松山市，滑川町，嵐山町，小川町，川島町，吉見町，鳩山町，ときがわ町の9市町村からなる）は、東部に水田地帯，中央部に丘陵地帯，西部に標高500～800mの山地といった変化に富んだ地形を擁し，その中を荒川の支川である越辺川，市野川，都幾川，槻川などの清流が流れる。中でも市野川流域は，高度経済成長期に急速に宅地化が進んだものの，蛇行した流路や周辺の河畔林などは昔のままに残され，豊かな自然を育ててきた。しかしその一方で，蛇行した川はこれまでたびたび水害を発生させ，流域の住民は被害に悩まされ続けてきたという。そのため1996（平成8）年3月，治水と環境に配慮した当時としては画期的な「市野川水辺空間整備計画」が策定されたが，その後の10年間で自然環境の捉え方，社会情勢，環境に対する意識が大きく変化。当初の計画のままでは市野川の貴重な自然を守れないことに気付いた住民たちは計画の見直しを求め，2006（平成18）年，住民と行政，専門家が連携した新たな「いい川」づくりがスタートした。

治水と環境に配慮した 「市野川水辺空間整備計画」を策定

市野川は埼玉県寄居町牟礼の丘陵地（下金井・金井）に始まり、小川町や東松山市を流れながら、新川、粕川、滑川、新江川を併合して川島町（55.6km地点）で荒川に合流する自然豊かな河川。

●「中学2年生までは毎年、夏になるとヤスで魚捕り、春と秋には魚釣りをしていました。魚は当時、家族にとって重要な蛋白源でしたから……。市野川の水はきれい、今から考えると夢のような美しさでした。また、河畔林にはカブトムシ、クワガタなどがたくさんいました」（圃場整備準備会副代表／上野広氏）。

●「北側には堤防があり、その先には水田が広がっていました。また、南側は緩い斜面になっていてコナラやクヌギ、ケヤキ等の

樹木が生い茂り、市野川は通称『緑の帯』と呼ばれていました。子どもたちはこの豊かな川で遊び、自然から素晴らしい知恵や強い力を授かったものでした」（月輪・環境を守る会代表／澄川清治氏）。

——といった声が聞かれるように、昭和30年代頃まで人々は市野川と密接に関わりながら生きてきた。しかしその一方で、市野川は東武東上線・森林公園駅の北部で大きく4回蛇行するため、大雨が降ると雨水がスムーズに流れず、「羽尾糠が谷戸地区（森林公園駅付近）では1980年代まで水害が頻発」（上野広氏）していたという。

そのため埼玉県東松山土木事務所（現・埼玉県東松山県土整備事務所）では、1988（昭和63）年に蛇行を繰り返す旧河道を直線化し

■「市野川水辺空間整備計画」概要図



■市野川流域図



て上下流と繋ぐ整備計画を策定。しかしその後、1990年に河川整備の方針が「多自然型川づくり」に変わったことから、計画は再検討されることになる。1995（平成7）年3月、埼玉大学工学部の佐藤敏之助教授を委員長に、財団法人埼玉県生態系保護協会、東松山淡水生物研究所、市野川改修促進協議会、地元自治体（埼玉県、滑川町）からなる「市野川水辺空間整備計画検討委員会」が設置され、整備計画の再検討を開始。その結果、より環境に配慮した「市野川水辺空間整備計画」が1996（平成8）年3月に策定された。



東武東上線の森林公園駅近くで蛇行を繰り返す市野川。河畔林が生い茂り豊かな自然を形成する一方で、たびたび氾濫を繰り返してきた[写真提供／PASCO]



工事が進む中、市野川の自然の貴重さに改めて気付いた地域住民

「市野川水辺空間整備計画」は、整備区間をA～Dの4区間に分けて蛇行部分に「親水ゾーン」「バッファゾーン」「自然保護ゾーン」を設けるという環境にも配慮した計画で、当時としては画期的なものだった。A区間の整備が進められていた2001（平成13）年2月に、行政とともに比企地区の川づくりを考えようと、住民たちによって「比企の川づくり協議会」（千葉茂樹事務局長）が設立★1され、同年7月7日の「川の日」★2に市野川で第1回河川見学会（主催／埼玉県東松山土木事務所）が企画されたのも、環境に配慮した河川改修が進められていたからだったという。

第1回河川見学会はA区間の後に整備が予定されていたB区間で行われたが、ここで住民たちは市野川の自然の特異さ、貴重さに

改めて気付くことになった。

見学会当日、参加者は事務所から整備計画の概要の説明を受けた後、地元の里山保全の専門家である田村説三氏から、「比企流域の丘陵地や台地では地下水位が低いため、自然の状態ではクヌギよりコナラが優先しますが、ここでは地下水位が高いため、クヌギが優先した自然的な要素を持った二次林になっています。また普通、温暖帯のクヌギやコナラ林には、冷温帯に分布するハルニレは入り込めません。しかし、市野川の河畔林には川辺の隙間に入り込んでいます」と、羽尾地区に残された河畔林の解説を受けながら見学区間を回った。そしてこの時、田村氏は「この整備に当たっては、こうした植生の特徴を壊さない活用策を期待したい」と締めくくったと

1996年に策定された「市野川水辺空間整備計画」は、整備区間の地域特性を踏まえた上で、「住民にとって安全な川」「緑豊かな比企の自然を残す川」「地域に密着した川」という基本理念・方針に基づき、蛇行部分に「親水ゾーン」「バッファゾーン」「自然保護ゾーン」を設けるという環境配慮型の計画だった

いう。

「見学会の参加者たちは、これほど身近に原始河川の様相を呈している川があったことに一様に驚きの声を上げていました。地域の方々に市野川の河川環境に目を向けてもらう良いきっかけになったと思います」と千葉事務局長は当時を振り返る。

★1——「東松山・環境市民の会」と「荒川流域ネットワーク」の地元有志が2000（平成12）年10月に「比企流域懇談会」を開催したのをきっかけに、2001（平成13）年2月に「比企流域懇談会」として発足。その後、組織名と話し合いの場が同じ名称なのは紛らわしいと、組織名を「比企の川づくり協議会」に変更した。
★2——河川と人との関わりとその歴史、河川を持つ魅力等について、広く国民の理解と関心を深めることにより、河川行政が地域住民等との連携・協調の下で展開されることを目的として、1996（平成8）年度に制定された。



市野川を正しく理解し、住民、河川管理者、市町村などが共通認識を持ってほしいと、2001年7月に開催された第1回河川見学会の様子。住民たちは里山保全の専門家から市野川の河畔林の特徴などを学んだ



川にせり出すように繁茂する河畔林。住民たちは市野川の自然の貴重さに改めて気付いたという

期待と懸け離れた整備状況に 住民は計画の抜本的見直しを要望

市野川の自然の貴重さを再認識し、その後も行政とともに、川や流域の現状や在り方についての話し合いや勉強会などを続けていた「比企の川づくり協議会」では、2004（平成16）年の「川の日」に、「みんなで川の現状を知り、川づくりの在り方、川と人との関わり方について考えよう」と、すでに整備が終了していたA区間で第2回河川見学会を開催した。

だが、断面形状を複断面にするために多くの河畔林が伐採され、ふとん籠（鉄線で編んだ籠の中に玉石または割栗石を入れたもの）で整備されたA区間の護岸の整備状況は、環境への関心が高まっていた住民の期待に十分応えるものではなかった。さらに東松山県土整備事務所からは、「現地測量の結果、B区間では蛇行河川より新河道の河床が低くなることから、蛇行河川に水を流すため掘削する」

という説明があった。そのため、現地見学会に続いて行われた事務所との質疑応答では、

- 「整備計画のイラストと実際の整備が違うのでは」
- 「この計画は周辺の市街地整備、農地整備計画を踏まえてゾーニングされているが、現在の周辺の土地利用、将来計画と連動しているのか」
- 「この辺りの市野川にはヤリタナゴが生息しているが、農業用水や周辺の田んぼとの繋がりが大切。川だけの取り組みでは保全できない」

——等々、住民側からさまざまな疑問や意見が出されたという。

また、「市野川水辺空間整備計画」の検討委員会に加わっていた財団法人埼玉県生態系保護協会の堂本泰章事務局長からは、「こ

の計画は河川法改正^{★3}前の1996（平成8）年に策定されたもの。この10年余りの間に自然環境の捉え方、社会情勢、環境に対する意識が世界中で大きく変わっている。日本でも2003（平成15）年に自然再生推進法が施行され、蛇行河川の復元が行われる時代になってきた。もう一度、現存する蛇行河川を生かす方法を考えていったらどうか。住民の盛り上がりもあり、計画を抜本的に見直す良い機会だ」という提案もなされた。

見学会終了後、「比企の川づくり協議会」では「市野川水辺空間整備計画」の抜本の見直しを事務所に要望したが、事務所からの回答は、「当初の計画で地権者に説明し、すでにほぼ全区間で用地買収が終わっているため、計画は変更できない」というものだった。

★3——1896（明治29）年に「治水」を目的に制定された河川法は、1964（昭和39）年に「利水」を目的に加えた体系的な制度に変更。1997（平成9）年には新たに「環境」がその目的に加えられ、「河川環境の整備と保全」「地域の意見を反映した河川整備の導入」を目指すことになった。



蛇行部分をショートカットする形で新たに掘削されたA区間の水路。その整備状況は環境への関心が高まっていた住民たちの期待に応えるものではなかった



原形のまま保全されていたA区間の蛇行部分の状況を視察する住民たち



東松山県土整備事務所の職員から整備状況の説明を受ける住民たち



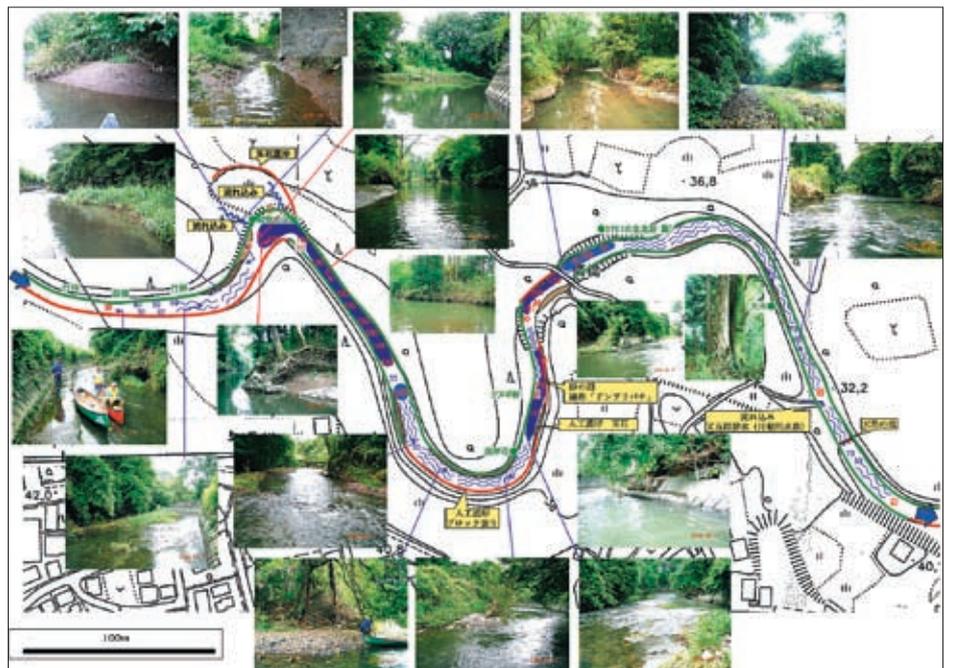
「市野川水辺空間整備計画」の策定に関わった堂本氏からも計画の抜本的な見直しが提案された



財団法人埼玉県生態系保護協会の協力で、2006年6月～7月にかけて行われた河畔林調査と魚類調査の様子



2006年9月に実施された「市野川天然河岸川下り調査」。市野川の自然を目の当たりにした参加者からは「まるでジャングルクルーズだね」という感想も



「市野川天然河岸川下り調査」を基に作製された河川環境情報図

計画の見直しに向けて 住民によるさまざまな調査活動が始まった

東松山県土整備事務所からの回答を聞いて「比企の川づくり協議会」では再協議。「B区間の蛇行河川に極力手を加えずに、常時水が流れるよう計画を見直してほしい」との意見書を事務所に提出した。事務所ではその意見書を基にB区間の再検討を開始し、2005年の暮れに、「比企の川づくり協議会」と堂本泰章氏に「新河道に堰を設けることで常時、蛇行河川に水を流す」という案を説明。そこで「比企の川づくり協議会」では、この計画内容を広く住民に説明してほしいと、事務所に「比企流域懇談会」の開催を要請した。

しかし2006（平成18）年2月に開催された「第5回比企流域懇談会」では、事務所か

ら計画についての説明を聞いた川村ヒサオ氏（NPO法人荒川流域ネットワーク副代表理事）や小林一巳氏（新河岸川水系水環境連絡会）などの参加者から「これまでの経験から、この計画では蛇行部分が埋まってしまわないか」という指摘が相次いだ。

この懇談会をきっかけに住民たちは立ち上がった。まず、「比企の川づくり協議会」の主催で2006年6月11日に、天然河岸及び河畔林の種類（特に高木）と植生構造の把握を目的とした調査を、7月1日には仕掛け網や投網を使った川の生き物調査を実施した。

6月11日の調査では市野川の護岸がハルニレ、ケヤキからなる原始河川の様相を呈す

る天然護岸であること、河畔林はケヤキ、ハルニレ、ヒノキなどの高木で構成されていること、カワセミなどの野鳥や野ウサギなど多くの生き物が生息していることを確認。

また7月1日の調査では、羽平橋周辺（上流側）で12種、蛇行河川（整備予定地）で14種、両家橋周辺（整備済みの下流側）で8種の魚類が見つかった。こうしたことから、特に蛇行河川は瀬と淵が形成された魚類相の豊かな川であることなど、多くの事実を確認することができた。

さらに9月17日には、羽平橋下流から両家橋脇の親水護岸までの区間で「市野川天然河岸川下り調査」を実施。10月にはその成果を基に河川環境情報図を作製した。

こうして蓄積されたさまざまな知見は、その後の「いい川づくり」の検討に大きな役割を果たすことになった。

専門家のサポートを受け、 計画は抜本的な見直しへ

第5回比企流域懇談会終了後、「比企の川づくり協議会」では「蛇行河川一体を氾濫原としてはどうか」という提案書を東松山県土整備事務所に提出。また7月には、すでに黒目川のいい川づくりで成果を上げていた新河岸川水系水環境連絡会の小林一巳氏や藤井由美子事務局長の勧めで、全国のいい川づくりの取り組みを参考にするため、第9回「川の日」ワークショップに出掛けることにした。

「川の日」ワークショップでは、「熱意を持って全国で活躍されているたくさんの市民や専門家と知り合うことができました」と千葉事務局長が話すように、いい川づくりに情熱を燃やす人々とさまざまな意見交換ができたという。そしてそうした中で、川の専門家の吉村伸一氏（株式会社吉村伸一流域計画室代表）と萱場祐一氏（独立行政法人土木研究所・自然共生研究センター★4長）に「市野川では現在、整備計画が進められているが、川の自然の営みの中で蛇行河川は維持されるのか」という相談ができたことが、事態を大きく動かすきっかけとなった。

両氏は「この計画では貴重な蛇行河川が埋

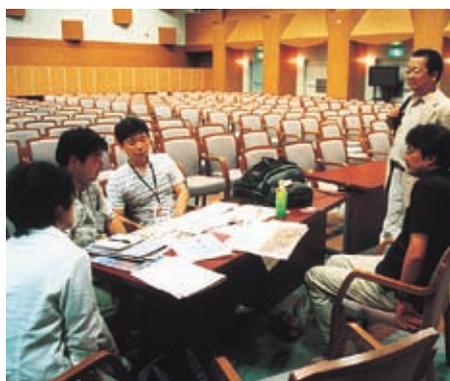
没する可能性がある。科学的な知見に基づいたきちんとした検討が必要」とアドバイス。早速、市野川の現状を確認するため現地へ赴き、計画の見直しに向けての応援団を買って出てくれたのだ。

専門家という心強い味方を得た「比企の川づくり協議会」では、事務所に住民と専門家を加えた整備計画の再検討のための委員会の設置を申し入れた。そして2006（平成18）年8月、5市民団体（当初は月輪・環境を守る会、比企の川づくり協議会、圃場整備準備会、新河岸川水系水環境連絡会の4市民団体でスタート。途中から美しい町つくる会が参加）、専門家（吉村伸一氏、萱場祐一氏、堂本泰章氏）、行政（滑川町、埼玉県東松山県土整備事務所、コンサルタント）からなる「市野川協議会」が発足。住民側を事務局とする同協議会でB区間における整備計画の再検討がスタートすることになった。

★4—岐阜県各務原市川島笠田町に造られた施設で、河川湖沼の自然環境保全・復元のための基礎的・応用的研究を行い、その結果を広く普及することを目的としている。



2006年7月22～23日に開催された第9回「川の日」ワークショップで、市野川の整備計画について相談する「比企の川づくり協議会」のメンバー。整備計画の見直しがなかなか進まない中、全国各地の「いい川」づくりの取り組みを参考にするために出向いた「川の日」ワークショップで、多自然川づくりチームの吉村氏と萱場氏にB区間の計画の妥当性を相談できたことが計画を見直す大きなきっかけとなった



2006年7月29日に市野川を訪れ、川の様子を視察する吉村氏



2006年8月21日には萱場氏も視察に訪れ、川の生き物などを調査した



検討の結果、「2way方式」による整備が採用されたB区間。新河道は河畔林や又五良水路を保全するとともに、周辺地形と調和させるため曲線的なルートに変更された



計画の見直しにより、原位置のまま保全されることになった又五良水路



直し計画
洪水流量を負担する川と位置付け、将来的にも一級河川として、流れる川として維持管理されることになった。



周辺地形との調和に配慮した曲線的ルートに変更。
のみの景観に配慮した石積護岸に変更。
の創出などを付加。



河岸に生い茂る河畔林。「1way方式」では川幅を広げるために貴重な河畔林を伐採しなければならなかったことも、「2way方式」が採用された理由の1つだった



5市民団体、3人の専門家、滑川町、埼玉県東松山県土整備事務所、コンサルタント会社が参加して2006年8月に発足した「市野川協議会」により、B区間の整備計画の再検討がスタートした



現地調査を行い、新河道の川幅やルートを検討する市野川協議会のメンバー



全体のイメージを共有するため、模型を作製して具体的な検討が重ねられた

「市野川協議会」による具体的な検討がスタート

「市野川協議会」でまず最初に検討されたのは、現在の蛇行河川の川幅を広げることで洪水を処理する案(1way方式)と、新たに水路(新河道)を造って洪水を新河道と分担する案(2way方式)のどちらを選択するのかということだった。専門家たちの意見は「長期的に見ると、蛇行地形を保全できる『1way方式』が基本」だったが、「思い出っばいの今の川をそのまま残してほしい」という住民からの強い要望もあり、最終的には「2way方式」に決定した。

「2way方式」に決定した後も細かい部分の検討は延々と続いた。萱場氏からは「平常時は蛇行河川に水を流すが、新たに造る水路もワンドとして機能させたらどうか」と提案され、新河道の入り口に固定堰を設け、洪水時に溢れた水が新しい水路に流れるように計画を変更。また、住民が行った環境調査の結果や吉村氏からのアドバイスを基に、新しい水路は直線的な河道ルートを見直し、又五良水路の保全と周辺地形との調和を考慮し

た曲線的なルートに変えられることになった。

こうした検討作業は、川と周辺地形との位置関係をメンバー全員がより明確に把握できるよう、「急遽模型を作ってもらい、イメージを共有しながら」(千葉事務局長)進められた。「それができたのは、専門家が応援してくれたおかげ。行政と住民だけではいい答えは出せなかったと思います」(千葉事務局長)。

B区間の計画は大きく改善されたが、それでもまだまだ課題は残されているという。特に「2way方式」は全国的に事例が少なく、工事完成後にこの川が今後どう変わっていくかは誰にも予測できない。そこで2008(平成20)年度には、萱場氏の指導の下、モニタリング調査[★5]を開始する予定になっている。また事務所からは、C、D区間の計画の検討は、モニタリング調査の結果を踏まえて行うとの方針が示されている。

★5——羽平橋、高橋、両家橋に目盛りを付け、住民と東松山県土整備事務所職員が連携して日降雨量と水位を記録することになっている。

住民参加から住民主導へ これからも続く市野川の「いい川」づくり

「B区間の計画変更の検討についても本当は公開で進めたかったのですが、時間的な制約があってできませんでした。しかし、今年の1月12日には『市民による川の国・埼玉シンポジウム in 市野川』を開催し、ようやく住民の方に参加していただけるスタートが切れました」と千葉事務局長はうれしそうに話す。

滑川町エコミュージアムセンターで開催されたシンポジウムには100人余りが参加。「市野川の原風景」や「今の市野川」の紹介に続き、東松山県土整備事務所の神谷彰部長が埼玉県の河川整備方針、市野川河川整備計画について説明した後、萱場氏、吉村氏、堂本氏の3人の専門家による「市野川多自然川づくり学習会」が行われた。

その後、九州大学大学院教授の島谷幸宏氏をコーディネーターに、「市野川のこれからの川づくりについて」をテーマにした公開討論会を実施。討論会では主に市野川河川整備計画について「どんな整備計画なのか良く分からない」「これから工事する所はそのまま残せないのか」など多くの意見や質問が集中。住民の関心の高さがうかがえたという。

そうした熱意が伝わり、最後に島谷氏から「この川は素晴らしい。また、住民の皆さんの熱意も素晴らしい。だからきっと何か素晴らしいことができる。日本一の川づくりを目指してほしい」とエールが送られた。

さらにシンポジウム終了後に行われた実行委員会では、こんなことが話し合われたと千

葉事務局長が教えてくれた。「住民の意見をまとめるのは住民じゃないと難しい。しかしどうまとめていくのが課題だ。特に地元には地元の歴史とルールがあるので、まずきちんと地元の“歴史を調べる部会”をつくろう。それから“川遊びをする部会”，河川環境をきちんとモニタリングする部会などもつくって活動を行い、毎年1回、住民が話し合いのできる“市野川のグラウンドデザインを考える市民の会(仮称)”をつくっていき。そうしたことを積み重ねていくうちに、『市野川をどうしたいのか』という意見が自然にまとまっていくのではないかと。さらに、治水についても勉強を続け、“住民参加”から“住民主導”のいい川づくりを目指していきたい」。

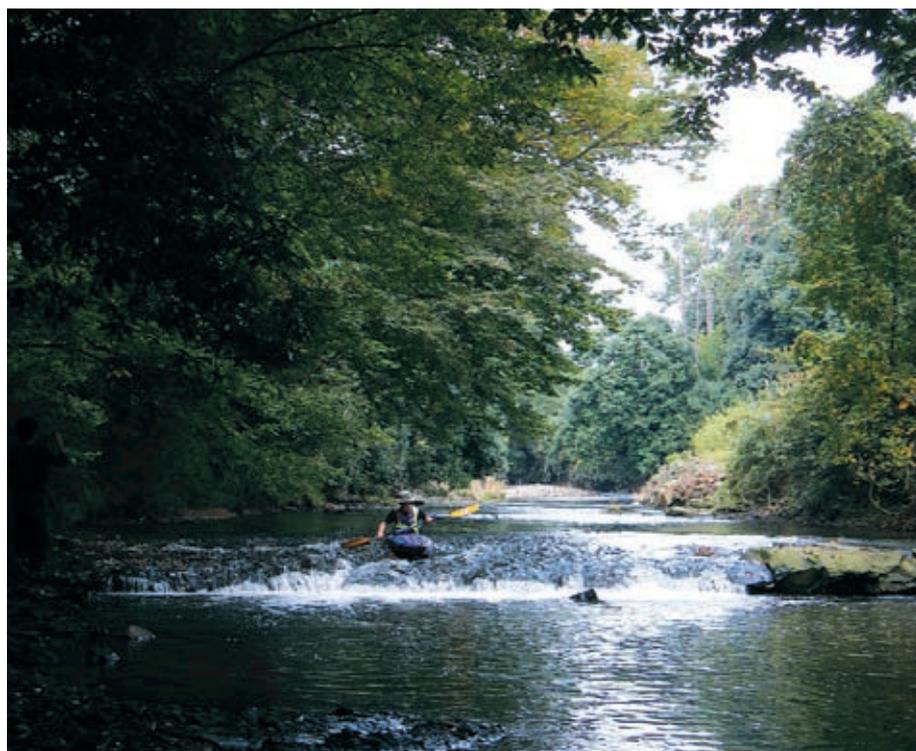
なお、事務所からも「市野川協議会ではいろいろと勉強させられた。今後は計画のより早い段階で、住民側の意見を取り入れていきたい」とのコメントが伝えられている。



シンポジウムの前に行われたB区間の工事現場の視察。専門家と住民たちはB区間の整備状況を確認した後、シンポジウムに臨んだ



今年1月、近隣の住民に呼び掛けて開催された『市民による川の国・埼玉シンポジウム in 市野川』。会場となった滑川エコミュージアムセンターは、市野川とともに育ち、生活してきた多くの近隣住民でいっぱいに



原形保全されているA区間の蛇行河川。シンポジウムに参加した島谷氏からは「とても素晴らしい川だ。住民の皆さんの熱意にもびっくりした。きっと素晴らしいことができるに違いない。ambitious!」との激励が送られた